働く理由　エピソード（起業家：女性）

子どもが生まれたら、母性は勝手に備わるものだと思っていました。「子どもから離れたくない」という気持ちが自然と湧き上がるものだと思っていた。しかし、私は分娩室で第一子を産んだ、その瞬間も仕事のことを考えていました。大学を卒業し、希望の会社に就職し、結果を出し、ようやく自分のやりたい仕事を手にした矢先の妊娠でした。「何のために今まで頑張ってきたんだ。子どもを産んだら私はすべてを手放さなければならない」3か月間、毎晩泣きました。「なんで女だけがこんな目に」主人にあたったこともありました。

育児休暇中はつまらなかったです。毎日まともな日本語を話さず、世間からも隔離され、一言も人とコミュニケーションをしない日も多々ありました。孤独と自分の能力の衰えを必死で防ごうと、子どもを連れて自治体のボランティアに行ったり、おんぶしながら勉強していました。第一子の育児休暇後、仕事に行くことが楽しくて仕方がありませんでした。毎日、キラキラな音楽を聞きながら通勤をしていると自分はまだまだ独身の男たちと渡り合えるビジネスウーマンなのだと自覚することができました。

しかし、育児と仕事の両立は想像以上に難しく、家では怒ってばかりでした。「ママはお仕事で疲れているの。言うことを聞きなさい」ある日、ふと鏡を見た時、自分の顔に愕然としました。眉間にしわを寄せ、目は吊り上がり、こんな顔を毎日子供に見せていたのか、と。苦しかったです。子どもとの生活を楽しめないことがつらかったです。私の幸せって何なのだろう。そんなことを考えるようになりました。第二子の育児休暇中、電車好きの息子といつも駅に寄り電車を見ていました。私にとってはつまらない時間でした。しかし、ふと電車が来た時に見せる息子の顔や車掌さんに手を振ってもらえた時の興奮した様子を目にした時、「ああ、私は今まで電車を見ていたからつまらなかったのか。こんなにも表情が変わり、毎日成長している息子を見ていることってこんなにも面白いのか」2年たって私はようやく少し母になりました。

子どもとの時間も確保しつつ、仕事もやりたい。双方を叶えるには「起業」することがベストでした。
今は「子どもやママの力で企業や行政に実益を生み出す」という事業を行っています。どちらも今までビジネス界では「戦力外」の存在だったからこそ、新しい価値を生み出すことができると私は信じています。

Copyright ©　City of Osaka. All Rights Reserved.

働く理由　エピソード（システムソリューション企業　人事 教育担当：男性）

学生時代は自身のアルバイト経験や周囲の環境もあり、外食産業に興味を持っていました。もちろん就職活動では、迷わず外食産業ばかり選考を受けました。めぐり合わせもあり複数社から内定を頂きましたが、お客様に喜んでもらいたい一心で「最もマニュアルが整備されていない企業」へ就職しました。

しかし、いざ就職して働いてみると少しずつ違和感を感じ、少しずつ自分自身が何をやりたいかを考えるようになりました。結果として「人と関わりたい」という軸は変わりませんでしたが、「中長期にわたり人と関わっていきたい」というのが自分が大切にしたいことだと気付きました。

そこで、学生時代に教職課程を履修していたこともあり「教育」というキーワードで仕事を探し、次のステップとして人事の教育担当を選びました。自分が持っていた人事の仕事のイメージは、人前に立って話す派手なイメージでした。しかし、いざ仕事を始めてみると、それは仕事のほんの一部で、むしろリスト作成・資料印刷・関係者調整などの一見地味に見える仕事の連続でした。教職課程（学校の先生になるための大学での勉強）を履修していたから大丈夫だろう、という甘い考えは砕かれ、正直に言うと本当に毎日が苦労の連続でした。

そんな中、転機となったのは最初に関わった新人研修でした。当時の自分は新人の3歳上という年齢で、右も左もわからない中、講師として新人の前に立って色々な研修を行いました。自身の仕事の効率が悪かったこともあり、自転車操業のような状態で、毎晩翌日の研修内容を懸命にインプットして練習していました。そして数週間の新人研修が終わった後に、新人からお礼の色紙をもらいました。この時の嬉しさは今も忘れません。仕事は感動ができるものだと知った瞬間でした。

企業教育の仕事は「影響力」という意味でこれ以上ない仕事だと思っています。毎年数百人の新人に大切なことに気付いてもらっています。その新人が成長して社会に与える影響は大きいと思います。今は誇りを持って充実した毎日を送っています。

Copyright ©　City of Osaka. All Rights Reserved.

働く理由　エピソード（こども英語教室講師：女性）

結婚し、妊娠（双子の男の子）したのと同時期に夫の地方への転職が決まり、当時勤めていたインテリア関係の会社を退職しました。その後三男も出産し、あっという間に7年の月日が流れていました。３人の息子を抱え、目まぐるしく毎日が過ぎていく子育ての日々は、大変なこともありますがとても楽しく、かけがえのないたからものです。しかし、妻として、母として以外の本来の自分をどこかに置いてきてしまったようで、時おり寂しくなることがありました。

そんな時、かつて英会話講師をしていた時の教え子からの手紙が届きました。『先生、私も英語の先生になりました‼』私は、嬉しくて目頭が熱くなり、当時彼女に英語を教えていた時の熱意を思い出しました。私自身、『英語』との出会いがなければ、今の人生はなかったと思います。もしかしたら、「彼女にとって、私がその出会いに関われたひとりになれたのではないか。」と思ったら、なんだかじっとしていられなくなったのです。『そうだ‼こどもたちに英語を教える自分の教室を持とう！!』そう心に決めてから半年・・・　目標が出来ると猛進する性格の私は、大学時代ぶりに夢中で英語漬けの生活を送りました。

発達心理学、児童心理学などをもう一度勉強しなおして、念願であった教室を無事開校しました。自宅で教室を開くということは、まだ幼い6才の双子の息子と3才の息子にいろいろと我慢を強いることになるので、心の中で『ごめんね』と謝ることもありますが、『英語を話すママが好き‼ママが英語の先生で嬉しい‼』と言ってくれている彼らの言葉が何よりの私の原動力です。

教室を開校して以来、教室に通うこどもたちの成長は、私の人生に彩りを与えてくれています。『Hello !』と元気に私の教室に入って来るこどもたち。彼らは私の鏡。彼らの成長は私の成長。私の教える英語をどんどん吸収し、キラキラした目で日々成長していく彼らがとても眩しく、この仕事を選んでよかった‼と心から思います。

Copyright ©　City of Osaka. All Rights Reserved.

働く理由　エピソード（研修講師・コンサルタント：女性）

私が中高生の頃には、何のために働くのか…どんな仕事がしたいのか…まだよく分かりませんでした。でも、17歳で父が亡くなり母と妹と祖母の女性だけの家族になった時、「女性でも生涯一人前に働ける人にならなくてはいけない」ということだけは強烈に思いました。それからは、将来どんな職業に就こうかと、色々考えました。

大学生の時には秘書検定を受けたり、家庭教師や塾講師のアルバイトをしたりしながら、中学高校の社会科教員免許をとりました。それでも、大学4年生で就職する頃になっても、まだどんな仕事をしたいのかわかりませんでした。むしろ「まだまだ世の中の事が分からないから、色々な業界の事をもっと分かるようになりたい！」という理由で、経営コンサルタント会社に就職し、営業の仕事をしました。

そこでたくさんの会社や団体を訪問して「人や組織の悩み」を聞かせていただき、その問題を解決するための提案をしていく中で、人や組織の悩みを解決していくことが仕事になり喜んでくれる人がいるという事を知ったのです。結果を出さなければならない仕事は、厳しく大変でしたがとてもやりがいがあり、良い営業成績の結果が出た時などは頑張って来た自分へのご褒美のようでとても喜びを感じました。

家族の病気があったり、結婚して3人の子どもを育てたりしている間はその仕事から離れていましたが、やはりまた人と組織の成長を応援する仕事がしたくて、40歳を超えた現在は研修講師・企業コンサルタントの仕事に再挑戦し、自分自身が悩んで来た女性の働き方や女性が働きやすく成果をあげられるような組織づくり、そしてぶれない心の芯を持った人の育成を目指して日々活動しています。

学生時代から現在まで学んできた事や全ての経験は、現在でも何かに繋がっています。これまでを振り返ってみて大切だと思う事は、先が見えなかったり分からなかったとしても、今目の前にあるやるべき事に本気で取り組めば、次の道が見えてくるということです。「良い人生を歩みたければ、まずは自分を磨く事」と母から教わった事は、今でも大切なことだと感じています。

自分を磨くこと、人が喜んでくれること、それが私にとっての働く喜びです。

Copyright ©　City of Osaka. All Rights Reserved.

働く理由　エピソード（外食産業：男性）

大学を卒業して就職したのはハンバーガーチェーンを展開する企業でした。学校を出たら働くということに特に疑問もなかったので、働くことに理由らしい理由はありませんでした。あえて言うならお金を稼ぐためだったと思います。人に言えるような立派な目的や志があったわけではありません。そんな感じだったので、仕事をとても甘くみていました。

アルバイトをしていたので同期の新入社員よりも作業ができました。きっと同期の誰よりも早く店長になれる。そしてその上にあがって、もっと偉くなってお金を稼いで…と思っていました。しかしやがて、働くということはそんなに甘くないということに気づかされることになります。同期社員はどんどん昇格していって店長になってきますが、自分にはいつまでたっても声がかからないのです。心の中は不満や焦りでいっぱいでした。どうして自分だけが。

そして、ついに恐れていたことが起こりました。同期が店長として自分のいる店にやってきたのです。悔しさ、情けなさ、腹立たしさ。一気にいろんな感情が沸き起こりました。気持ちを切り替えるために毎晩アルバイトをつれて遊びまわっていました。仕事中はいつも早く仕事がおわらないかなあ、とか、あと何日で休日だなあ、と考えていました。できない社員の見本になっていました。ある時同期の店長が私に言いました。「あなたは、どうして店長になれないか分かりますか？」。その時は反発する気持ちだけでした。

やがて、店長が私より先に他の店舗に変わることになり送別会が開かれました。そこでアルバイトが次々に店長に感謝の言葉を述べるのです。「自分が成長できたのは店長のおかげ」「続けられたのはあの時の一言があったらから」など。正直とても驚きました。自分の送別会ではこんなことは一度もありません。そして、そんな言葉を受けている同期が自分よりもずっと大きな人間に見え、ようやく気づきました。働くことは人と信頼関係を築くことなのだ。大変なことから逃げないから成長していくのだ。ずいぶんと遅い気づきでした。

でも、おかげで今は働くことが大好きです。自分自身の成長のためにこれからも働いていきたいと思っています。

Copyright ©　City of Osaka. All Rights Reserved.

働く理由　エピソード（スマートフォンサービス：男性）

生活をするため（=お金を稼ぐ）以外にも働く理由はあります。私が考えるその理由は大きく二つあり、一つは「自己表現」、もう一つは「社会に貢献する」ということです。

就職活動中に自分自身と向き合い考えたことは、「働くこと」で「自己を表現したい」ということでした。たどり着いた答えが『世の中にインパクトを残したい』という想いです。このことを実現するために、携帯電話の会社に就職しました。なぜならば携帯電話やスマートフォンは24時間、365日、いつでも身の回りにあるからです。そして何億人もの人が使っています。「より多くの人が使うもの」に携わることで『大きなインパクト』を残せるのではないかと考えました。自身が担当するサービスや企画を、何千万人もの人が使っていることを考えてみてください。毎日ワクワクしながら働いています。

もう一つの働く理由は「社会に貢献する」ことです。では、「社会に貢献する」とはどういうことでしょうか。私たちが納める税金は「社会に貢献する」ものの代表的なもののひとつですが、例えばスマートフォンのメッセージ機能。友達との関係や、時には生命の危機を連絡するための「ライフライン」という観点では「社会に貢献している」大切な機能です。もっとありそうです、それは何でしょう。

「社会に貢献する」ということを強く意識することになったきっかけは、子どもが出来たことでした。今、３人の子どもがいます。「社会に貢献すること」と「子どもたちのこと」を一緒に考えた時、「これから子ども達が生きていく未来のために出来ることは何か」と考えました。技術や科学だけではなくいろいろなものが進化してる中、私が考えた「未来に出来ること」は「働き方を多様にすること」でした。
ダイバーシティ（多様性）という言葉があります。女性に限らず、外国籍の人や障がいを持つ人など「いろんなひと」が「自分らしく」働けるような社会に貢献したいと思うようになりました。３人目の子どもが生まれた時、2ヶ月の「育休」を取得しました。日本における男性の育休取得率は2%ほどしかありません。欧米諸国に比べて非常に低い数値です。これから世界はもっとグローバルになりダイバーシティ（多様性）が進んでいく中で、より多様な働き方、多様な考え方が求められます。

「自分を表現すること」も「社会に貢献すること」も様々な方法があります。いろいろな「働く理由」を互いに理解しあえるような社会になるといいなと思いながら、日々目の前の仕事に励んでいます。

Copyright ©　City of Osaka. All Rights Reserved.

働く理由　エピソード（エンジニア：男性）

「人類を今よりちょっと賢くしたいから」
恩師である大学教授が、「なぜあなたは研究をしているのか？」という問いに対して発したこの一言に衝撃を受けました。

大学生の頃、私は物理学を勉強していました。中学、高校と部活に明け暮れていた私には特にやりたい事も見つからず、将来について明確な目標があった訳ではありませんが、唯一、物理が好きになり、アインシュタインに憧れ、「将来は研究者になりたい」と考えるようになり、とある大学の物理学科へ進学しました。

物理の勉強は大変でしたが、それに見合った楽しさもありました。大学卒業後に大学院へ進学し、宇宙を観測するカメラの研究やブラックホールの研究を行い、充実した研究生活を過ごしていました。しかし、将来の事を考えると不安がつきまといます。この研究を生涯続けていけるのか？この研究で世界のトップになれるのか？この研究で一生食って行けるのか？そもそもそんな研究やって何の為になるのか？といった不安と葛藤が入り乱れる状態となっていました。

そんな中、冒頭の一言が心に響きました。私が漠然と思っていた“やりたい事” は、まさにこの一言に尽きると感じました。それと同時に、この“やりたい事”を実現させる方法は、自分が研究者という職業に付く事だけではない事にも気きました。それまでは研究者になる事をあきらめることは 、“やりたい事“をあきらめる事だという考え方をしていましたが、これは間違っていました。私自身が研究者でなくても、研究者の使う実験装置を作るエンジニア、専門的な装置の部品を作る職人、未来の研究者を育てる学校や塾の先生など、「人類が今よりちょっと賢くなるため」に出来る職はたくさんあります。そのように考えるようになってから、色々な職業を調べるようになり、不安と葛藤で一杯だった頭が少し軽くなりました。

それから十数年経ち、現在私は当初憧れていた様な研究者としての立場ではありませんが、エンジニアとして宇宙を観測する人工衛星の開発に携わっています。日々行っている作業自体は地道な作業の積み重ねで、あまり格好の良いものではありませんし、面白い仕事ばかりでもありません。時にはあまりやりたく無い作業も必要となります。しかし、近い将来、この人工衛星を使ったデータが研究材料となり、宇宙を舞台にした未知の現象などの新しい発見ができれば、間違いなく人類は今よりも賢くなります。想像すると、ワクワクします。楽しみで仕方ありません。

「人類を今よりちょっと賢くするために」
これが、私の目標であり、働く原動力だと思っています。

Copyright © City of Osaka. All Rights Reserved.